

斜面に立ち並ぶ家々は、スペイン留学時代に制作されたセザンヌ風の《アーヴィラ》(図7)を強く想起させ、「家並みを俯瞰した構図」への須田の関心がみられる。実際須田の日記からは、家々が斜面に立ち並ぶ集落を意図的に探し歩いていることを伺うことができる。例えば、1953年6月の日記には次のようである<sup>(22)</sup>。

- 16日 電車で高の宮下車 徒歩で魚瀬へ カチ割石がしかれあり希臘を思い出す 漁村は傾斜面にあり石段で上下 大につかれる 寺の前でスケッチ等 その他でもやる 大した期待程にあらず スケッチ少々して帰途へ 電車で平田町へ〔泊〕
- 17日 バスで小伊津へ 海岸寄りで十号かき出す 隣の三津の灘村へ ここは狭く細長い漁村〔平田泊〕

須田は鳥取、松江に宿泊したあと須田は、宍道湖の北側に位置する漁村の魚瀬、小伊津、三津を訪れている。これらの漁村はいずれも、海岸に面した斜面に集落が形成されており、田後に似た特徴を有している。須田がこれらの漁村を訪れた背景には、松江在住の独立美術協会の画家・山中徳次などに、「家並みを俯瞰した構図」が描ける斜面に家並みが立ち並ぶ風景、という条件でふさわしい場所の紹介を受けたのではないかと推測される。だが実際には、魚瀬は急斜面に家々が点在している上、海上からでない家並み全体を遠望することができない土地であり、小伊津と三津も須田が求める風景とは異なる特徴の漁村であったため、「大した期待程にあらず」という感想に至ったと考えられる。もっとも須田にとって「家並みを俯瞰した構図」の風景を描くことは、《アーヴィラ》などスペイン留学中に魅了された光と陰が織りなす美しさを日本において再現することであった。なかでも田後の漁村は、上述のとおり須田を魅了する風景のひとつであり、《漁村田後》はこれまで紹介される機会こそ少なかったが、須田の画業においては欠かすことのできない重要な作品のひとつとして位置づけられよう。

## おわりに

須田国太郎にとって鳥取は、京都から比較的近く容易に訪れることができる土地であった。滞在中は浜田宣伴や、浜田の知人の家々を拠点に活動していることから、訪問を重ねる毎に知人の数も増えていったことがうかがえる。須田が鳥取を訪れた理由は、画友の浜田への協力とともに同地の風景に惹かれたからではな

いだろうか。中央から離れた地方都市で一流の作品を紹介し、世界に通用する人材を育成しようと高い目標を掲げ、尽力を惜しまず努力していた浜田の姿勢は、須田の足を鳥取に向けさせた。さらに、関西や山陽とは趣の異なる特徴を持つ土地もまた須田を惹きつけて止まなかったと思われるのである。

上述のとおり、本稿では須田と鳥取の関わりを紹介してきたが、その内容の詳細まで確認することができていないため、記録を羅列することにとどまった。これらの事実をもとにさらに踏み込んだ調査を行うことで、当時の鳥取の人々と中央の画家との交流が明らかとなり、当時の一地方都市の文化水準の高さを示す一助となると考えられるが、これらは今後の課題としたい。一方《漁村田後》に関しては、その制作に至る背景などを考察した。今後は本稿を更に深め、「家並みを俯瞰した構図」による一連の作品が須田の画業においていかなる位置づけにあるのか、セザンヌからの影響の可能性などを含めた上で改めて検討する必要があるだろう。

- (1) 2012年10月20日～11月25日。同展は、神奈川県立近代美術館、茨城県近代美術館、石川県立美術館、京都市美術館、島根県立美術館に巡回した。
- (2) ここでの日記とは岡部三郎『須田国太郎 資料研究』(叢書「京都の美術」I)京都市美術館 1979年による。
- (3) 島田康寛編「年譜」『須田国太郎画集』京都新聞社 1992年 488頁。
- (4) 扇邸は、現在の仁風閣(1907年建造、鳥取市東町)のこと。
- (5) 浜田重雄「美術七十年史⑤」日本海新聞 1953年5月31日
- (6) ロゴスは、鳥取市若桜町ある建物(現ロゴス文化会館)。時代と共に形態を変えており、当時は鳥取を代表する文化サロンであった。須田も座談会などに参加している。
- (7) 「第一回独立美術小品展」日本海新聞 1940年1月25日
- (8) 前掲註(5)
- (9) 前掲註(7)
- (10) 前掲註(7)
- (11) 「独立美術協会小品展を見る」日本海新聞 1940年1月27日
- (12) 「現洋畫壇の精鋭 独立美術會員小品展 七、八、九日鳥取市ロゴスで」日本海新聞 1940年12月5日
- (13) 「独立美術會員展」日本海新聞 1941年1月3日
- (14) 「独立美術協会洋畫展 鳥取市ロゴスで」日本海新聞 1942年1月6日
- (15) 原達夫「現代繪畫の理念(下) 独立美術會員秋季小品展を観て」日本海新聞 1942年1月9日
- (16) 「美術出陣の秋 鳥取県美術報国会誕生」日本海新聞

1943年8月19日

(17) 岡部三郎、前掲註(2)書、140頁

(18) 岡部三郎、前掲註(2)書、157、169頁

浜田宜伴は「新制大学は世界的国民教育の視野に立って、中央と交流し、地方文化の育成と興隆に寄与し、その中心的存在となること」を理念としており、「この時代には前述のようにすぐれた人材の交流という趣旨から、昭和26年に京大・京都美大に教鞭をとっていた須田国太郎を非常勤講師として招聘」したことが知られる(『鳥取大学三十年史』鳥取大学 1983年、237・238頁)。

(19) 岡部三郎、前掲註(2)書、60・61頁

(20) 『現代洋畫大全集14』アトリエ社 1936年

(21) 須田寛「追憶」『須田国太郎展 没後50年に顧みる』2012年 日本経済新聞社

(22) 前掲註(2)書、164頁

#### 【図版典拠】

[図1・2] 『須田国太郎画集』京都新聞社、1992年

[図3・4・5・6・7] 『須田国太郎展—没後50年に顧みる』  
展覧会図録、日本経済新聞社、2012年